

史跡
池辺寺跡
ちへんじあと



池辺寺（独鈷山功德池辺寺龍池院） —— 古代寺院の発見 ——

池辺寺は、熊本市西区池上町にあった天台宗の寺院です。奈良時代の創建と伝えられ、繁栄・荒廃・再興を繰り返しながら、明治時代の初めまで存続していたことがわかっています。

江戸時代の書物に古者の説として、「平村に古の池辺寺があった」と記され、昭和三〇年代以降に百塚地区や堂床地区で瓦や土器が見つかったことから、一帯が池辺寺の候補地と考えられてきました。また、池辺寺や池上町の「池」とは、『続日本紀』という史書に記載がある「味生池」のことです。味生池は、和銅年間（七〇八〜七一五）に国司道春首名（みちのきみのおびと）が築いた灌漑用の大きな溜池で、万日山・独鈷山・妙観山に囲まれた低地一帯に池があったと想定されます。

池辺寺の最有力候補地のひとつだった百塚は、「百（たぐさ）の塚がある」という意味で、古くから残る通称地名です。山中のいたる所に石が積みられ、現代まで「侍の塚がある」と伝えられてきました。昭和六一年度より熊本市教育委員会が同地区で発掘調査を開始し、百塚地区が平安時代初の池辺寺跡ということがわかりました。百塚地区は国史跡に指定され、保存整備を実施しました。



天台別院肥後國池邊寺側号者當寺根本御座所本尊正勸音靈像也
—— 金子塔碑文より ——



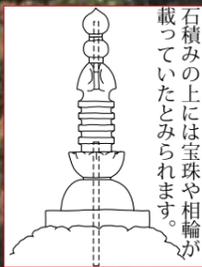
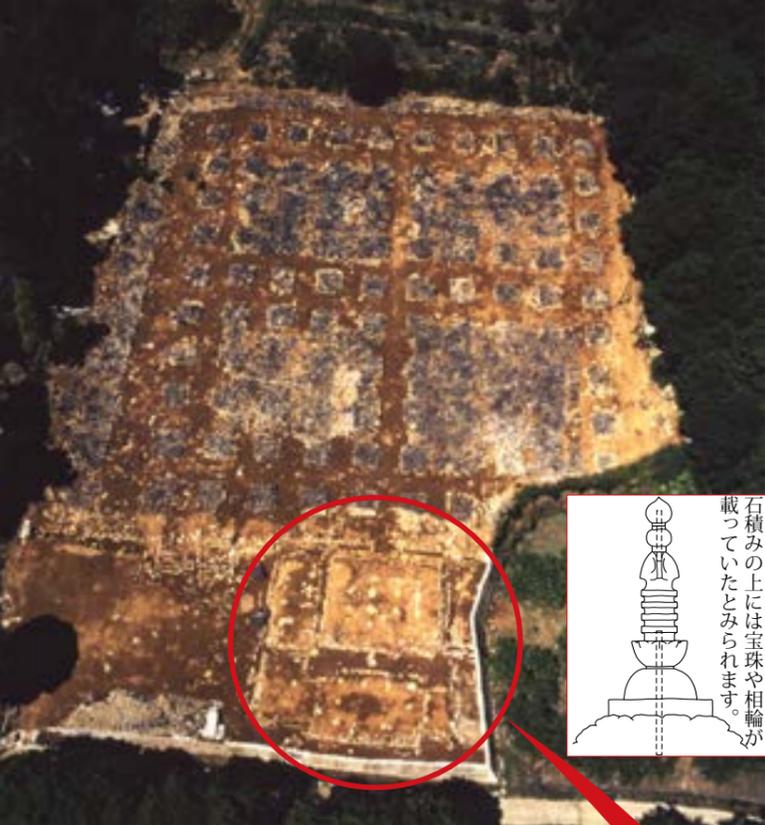
百塚 —— 池辺寺根本中堂 ——

百塚地区は平安時代初期（九世紀）の池辺寺跡です。本堂の礎石建物群は、博敷きの本堂の周囲三面を囲むように配置され、背後の斜面には一〇×一〇列の百基の石積みが整然と並んでいます。



石積みのひとつ

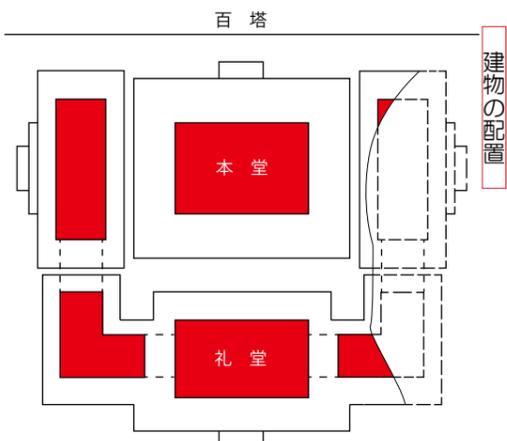
百基の石積みは塔の跡ですが、後世の人はたぐさの石積みを見て、塚（墓）だと思ったようです。百基の石積み、金子塔碑文にある「根本御座所」である「百塔」と合致し、伝説の池辺寺跡であることがわかりました。建物の前面には庭園風の池があり、格式のある荘厳な寺だったことがわかります。今から二二〇〇年程前の九世紀始め頃に創建し、九世紀の終わりに廃絶したとみられます。



石積みの上には宝珠や相輪が載っていたとみられます。

斜面を造成した約3,000㎡の区画に、10×10列で100基の石積みが並んでいます。石積みは一辺がおおよそ2.4mの方形に石を積み上げた低い塔です。この光景は圧巻で、「茶羅や菩薩を表現したもの」「平安時代の仏事にある石塔巡拝や石塔巡礼の場」などの説がありますが、百塔がどんな性格のものかは解明できていません。

百塚地区出土瓦 熊本博物館所蔵・熊本市教育委員会所蔵



百塚地区の本堂建物群は六棟の建物で構成されます。百塔に面した本堂の周囲三面を回廊状に建物を取り巻く配置です。本堂の正面に建物と並列し、回廊状の四棟が本堂と正面の建物とを繋ぐ構造になっています。建物の間には雨落ち溝が廻っています。

一帯から出土する土器や瓦の年代から、九世紀初めから、九世紀の終わりの寺院ということがわかります。



池辺寺縁起絵巻 第四話 僧仙海が修法により龍を改心させます。池辺寺跡財宝管理委員会所蔵。

池辺寺と龍伝説

池辺寺縁起絵巻

池辺寺に伝わる寺伝『観音講式』は現在失われていますが、文化元（一八〇四）年に写された『池辺寺縁起絵巻』が現存します。この絵巻には、池辺寺に関わる七つの説話が描かれています。

■ 第一話 「浮木の観音」

昔、味生池には悪い龍が住み、人々に害を与えていました。そこで時の国司が妙觀山の観音様に参ると、「池のほとりに寺を建て、法会を続けよ」とお告げがあったので、奈良の都に行つて天皇に願ひ、真澄という高僧を招ぐことになりました。

真澄は和銅三（七一〇）年に大変立派な寺を建てました。何年も大規模な法会を続け、ようやく龍を鎮めると、ふたたび観音様のお告げがあり、お告げのとおり池に行くくと、水面に木が浮かんでいました。その木で正観音像を彫り、ご本尊にしたということです。

池辺寺創設と本尊についての説話です。観音像は現在に伝わっています。

■ 第二話 「降りくだる独鈷」

大同元（八〇六）年弘法大師空海が唐で修行中に、三つの法器を日本に向かつて投げました。三鈷杵は高野山、五鈷杵は京の東寺、独鈷杵は池辺寺のある妙觀山に落ち、寺主暁覚が白犬に導かれて独鈷杵を発見したことから、妙觀山を独鈷山と呼ぶようになった。

寺宝として現存する独鈷杵についての説話です。

■ 第三話 「鳴落ちる金鈴」

子どもの頃池辺寺で修行をし、後に京都無動寺の高僧相應に教えを受けた仙海は延喜二二（九二二）年に京より帰国し、池辺寺の僧となった。ある日、鈴の音がしたかと思うと、師である相應が死ぬ時に投げ与えた振鈴が、仙海のもとに空から落ちてきました。

現存する五鈷鈴にまつわる説話です。

■ 第四話 「仙海の法験」

真澄の法会により鎮められていた龍が、女の姿に化身し独鈷と鈴を持ち出しました。龍の仕業を知った仙海が池のほとりに不動明王を安置し誦経すると、池から独鈷と鈴がもどり、龍は改心しました。龍は、早魃の際に鈴と独鈷を用いて修法すれば、必ず雨を降らせると約束したということです。

この時の龍が残した鱗が、寺宝として伝わっています。

■ 第五話 「山王の出現」

延長二（九二四）年、申の年、申の月に、申の日に独鈷山に三四匹の猿が現れました。一匹は神童を背負い、一匹は白い旗をもち、もう一匹は履物を携えていました。それを見た仙界は歓喜に絶えず、自ら絵を描いたそうです。

猿は天台の守護神である日吉山王の神の使いであり、池辺寺が天台宗で、独鈷山に日吉神社を設けたことを示す説話です。

■ 第六話 「金子観音」

昔、妙觀山の観音様に百夜詣でを遂げた金子という娘が、百塚で金色の観音像を拾いました。金子はそのご利益によって国司の妻となり、堂を建てて観音像を安置しました。堂は貞元元（九七六）年に焼失し、僧たちが落胆していると、空から白い旗が降ってきて、杉の木にとまったかと思うと、その上に観音像がありました。僧たちはもう一度お堂を建て、観音像をまつたということです。

この話を伝えるために建武四（一三三七）年に堂跡に金子塔を建てたそうです。金子塔は西平山山中に現存し、この碑文の誤読により、このような説話が生まれたのだとされています。

■ 第七話 「快珍の祈雨」

承暦年中（一〇七七〜一〇八一）、何日も雨が降らず人々が困っていたところ、天皇の詔を受けた池辺寺の僧快珍が独鈷と鈴を用いて七日間誦経すると、昔龍が約束したとおり三日間雨が降りました。その功績により、池辺寺は託麻郡を寺領として賜ったといわれています。

江戸時代にも藩の記録には、早魃の際に池辺寺で修法を行ったと記されています。



龍のうろこ

第四話の龍が残したとされる鱗です。熊本市指定文化財。池辺寺跡財宝管理委員会所蔵。



浮木観音像

第一話に登場し、池に浮かんだ木より作られたことから浮木観音と呼ばれる。正観音像です。熊本市指定文化財。池辺寺跡財宝管理委員会所蔵。



金子観音像

第六話で金子に拾われたとされる観音像です。金銅製胎内仏。厨子高 8.5cm。熊本市指定文化財。池辺寺跡財宝管理委員会所蔵。



独鈷杵と五鈷鈴

第二話の独鈷杵と第三話の五鈷鈴です。独鈷杵は鎌倉時代、五鈷鈴は平安時代後期のものです。熊本市指定文化財。池辺寺跡財宝管理委員会所蔵。

池辺寺宝物

池辺寺が廃寺となり、寺にあった仏像や寺宝類は一部散逸してしまいましたが、地元有志らが買戻し・寄贈・修復を行いました。現在は「池辺寺跡財宝管理委員会」として、仏像や寺宝類を守っています。

史跡 池辺寺跡

池辺寺スポットガイド

池辺寺跡では、百塚地区の保存整備を終え、皆さんに発掘された百塔や発掘当時を復元した本堂跡を見学いただけるようになります。ぜひ、古代山岳寺院跡の発掘当時の姿をご覧ください。

ここでは、周辺の散策ポイントも合わせて紹介します。



堂床より味生池を望む

■味生池（あじうのいけ）
万日山・独鈷山・妙観山に囲まれた低地一帯に想定されています。『続日本紀』によれば、和銅年間（七〇八～七一五）に、国司道君首名が築いた灌漑用の大きな溜池のごとく、現在は水田や宅地が広がっています。「池辺寺」や「池上町」の名前の由来となった池です。加藤清正や月感上人に埋め立てられたと伝えられています。堂床地区から一望できます。池のほとり、万日山の山裾に月感上人のお墓があります。



歴代住職のお墓

■池上日吉神社（いけのうえひよしじんじゃ）
池辺寺が最後に移転した場所です。百塚地区の池辺寺廃絶後、少なくとも永承三（一一九六）年には池辺寺はこの場所にあり、荒廃と再興を繰り返しながら、明治三（一八七〇）年頃に廃仏毀釈により廃寺となりました。神社境内には、池辺寺住職の墓碑が五基残されている他、宝篋印塔台座などがあり、市指定文化財となっています。



史跡公園として整備された、百塔と建物跡です。山中に築かれた平安時代の池辺寺を体感してください。

※駐車場は数台分あります。



■堂床の塔心礎（どうぶどのとうしんそ）
池上地区から百塚地区に至る途中、尾根が川沿いに突き出た区域を地元では「堂床」と呼んでいます。堂床地区には中央に円い穴があった一メートルほどの礎石があり、その周囲からはたくさん瓦が出土することから、三重塔が建っていたと考えられています。味生池を見下ろす高台に、池辺寺のシンボルのよう、塔がそびえていたでしょう。



現在も残る塔心礎

発掘調査では四メートルほどの大岩の脇から、たくさん灯明皿が出土しました。



金銅製胎内仏 谷川忠光氏所蔵

■馬場上と来迎院（ばばのうえとらいごういん）
馬場上は地元では「ばばとん」と呼びます。昭和二〇（一九四五）年に金銅製胎内仏が採集されました。来迎院については、『池辺寺縁起絵巻』に「往古は当山百二十坊のうち来迎院に二坊があった」と記述され、池辺寺の坊だったといわれています。両地区の発掘調査では主に中世の遺構がみつき、周辺の石造物や胎内仏から、中世には池辺寺に関わる施設があったとみられます。

■金子塔（かなごのとう）
建武四（一一三七）年に建てられた石製笠塔婆で、池辺寺の由来などが刻まれています。西平山の池辺寺跡からさらに奥の山道を進んだ尾根上にあり、現在は周囲にフェンスを設置しています。また、保存整備した池辺寺跡にレプリカを展示しています。

金子塔 碑文（現代語訳）
天台別院である肥後国池辺寺の側にある百塔は、寺の根本御座所であり、ご本尊は正観音聖像である。伝えるところによると、元明天皇の御願によって和銅年間に建立され、肥後国司綱家（字名は金子）の願望した寺であったという。仏像や百塔は、草木が姿をかえたもので、造形の口を知らない（ほどすばらしいものだった）。ところが、貞元元年正月七日に消失してしまったので、僧らが嘆き悲しんでいたところ、空から宝幡が堂の上に飛来し、ひるがえって杉の木の上にとまった。僧たちが宝幡を礼拝したところ、仏像が分けて杉の枝に現れた。そこで御在所を寺の近くに移し、三百余年という。以来、三三常住・万行成就の地となった。そこで靈法を末代に伝えるために、この石塔婆を建立し奉った次第である。敬白（謹んで申し上げます）。建武四年 丁卯月五日 勸進衆 丑 願主 大妙



四方4面に梵字と碑文が刻まれています。現在は覆屋が設けられています。



■独鈷山（どくこさん）
妙観山の南側、現在の井芹川と坪井川に挟まれたところにある、円錐形の山です。池辺寺に関連するものが多く、龍が天に昇ったとされる「登天石」、独鈷を洗う「妙檀水池」の他、寺院、石造物などがあります。現在は公園化されていますが、元々は巨岩が点在する独特の景観を持つ山でした。山の東側斜面にひっそりと八王子大権現が祀られています。



■高橋東神社（たかはしひがしじんじや）
井芹川と坪井川が合流する三角地帯の先端に立地します。江戸時代までは「天社大明神社」でしたが、明治初頭に「高橋東神社」と名前が変わりました。俗称は「天社宮・天社さん」、祭神は味生池を造った「道君首名（みちのきみのおびと）」です。大きなクスノキは市指定天然記念物で、樹齢一〇〇年以上といわれています。傍らに放牛地藏（第八八体、享保一六年）、境界石（享和二年）があります。



■聖徳寺（しょうとくじ）
応徳二（一〇八四）年、比叡山の良快法印が、薬師仏のお告げに従って肥後国へ下向の途中、入江の芦原から発する光を見つけた。近づいてみるとそれは長さ三尺の観音像であり、像の背に聖徳太子作とあったことから、建立した寺を聖徳寺と名付けました。ご本尊は十一面千手観音像で、脇には不動明王像と毘沙門天像が並びます。また二十八部衆のひとつ、雷神の像があり、本来は二八体の神像が祀られていたとみられます。

アクセスマップ



池辺寺跡まで「JR熊本駅」より徒歩約60分。

産交バス「池ノ上」下車徒歩約30分。

史跡 池辺寺跡



熊本市



お問い合わせ

熊本市文化振興課 埋蔵文化財調査室

TEL 096-328-2740

E-mail: maizoubunkazai@city.kumamoto.lg.jp